

～チェルノブイリとフクシマを結んで～

子どもたちの「夏キャンプ」への支援に取り組みます！

今年の夏も、皆さんからのカンパで、クラスノポリエの子ども達7人と、チェリコフの子ども達2人が、ロシアの非汚染地域で行われるノボ・キャンプに参加できることになりました。チェリコフの子ども達の参加は、今年が初めてです。子ども達は、二つのグループに別れて、それぞれ7月、8月に20日間ずつ森の中のキャンプで過ごします。クラスノポリエやチェリコフでは、今も森の入り口には放射能汚染の危険を知らせる立て看板が立てられている場所があります。放射能汚染のことを気にせず、自然の中で思いっきり遊んだりしながら過ごすことは、汚染地で暮らす子ども達の心身の健康と成長にとって、とても大切です。

私達は、チェルノブイリ支援の経験をフクシマ原発事故で被災した地域での支援にも活かしてゆきたいと考えています。フクシマ原発事故では、チェルノブイリ事故の際に放出された放射性物質の2-3割にも相当する量が、すでに大気や海に放出されたと言われていています。福島県などのかなり広範囲な地域が、日本の法律でも「放射線管理区域」（放射性セシウムで4万ベクレル/平米以上の汚染レベル）に相当するほどの汚染地域になってしまっています。経済的な条件も含め、様々な事情の下で、子ども達がいる家庭の全てが県外に「避難」できるわけではありません。そのような中で、この夏休みには、全国各地で原発被災地の子ども達の「夏保養」受け入れの取り組みが始まっています。私達も、京都の若者が取り組んでいるキャンプへ

の支援を始めました（8頁）。4月以降、寄せて下さった「義援金」の一部は、そのような取り組みに活用させて頂いています。キャンプの準備にあたっては、「救援関西」の医療スタッフが、キャンプのボランティアスタッフへの「子どもたちの健康管理」についての研修会も行いました。また、キャンプの期間中には子どもたちの健康チェックや健康相談も行う予定です。

先日、7月7日の七夕の短冊に、福島のある汚染地の子ども達は、「放射能が消えますように」「みんなが健康で元気に暮らせて、笑顔いっぱい幸せな家族でいれますように」と、書きました。この子ども達の願いが叶えば…と心から思います。しかし、見えない「放射能との闘い」は、これからも続きます。福島の子どもの思い、親たちの不安に触れるにつけ、私達はこの20年間のベラルーシの被災者への支援と交流を振り返り、「チェルノブイリ事故直後に、汚染地で暮らしたベラルーシの私達の友人はどのようにしてその困難を乗り越えてきただろうか。」「チェルノブイリのヒバクシャの心の『痛み』を、私達は、本当に理解していたのだろうか。」と、問い直しています。そして改めて私達のベラルーシの友人たちの経験に学びたいと考えています。

今後、チェルノブイリとフクシマを結んで、被災者どうしのお互いの交流もめざし、今の困難を乗り越え、そして今度こそ「繰り返してはならない」という共通の思いを実現すべく私たち「救援関西」の取り組みも強めてゆきたいと

思います。

今後とも、チェルノブイリとフクシマへの支援・連帯の取り組み、原発を止め、安全な再生

可能エネルギーへの転換を求める取り組みに、ご協力をよろしくお願いします。

チェルノブイリから 25 年のクラスノポリエからの報告

ベーラ・ルソーバ（小児医）

この原稿はチェルノブイリ 25 周年に来日予定だったエレナさんの報告資料としてベーラさんがまとめて下さったものです。エレナさんが来日できなり、資料のみを送っていただきましたので、ご紹介します。

事故後、汚染のために居住区、人口が減少

クラスノポリエ地区はチェルノブイリ原発から 250km 離れたベラルーシの南東にある。地区内にも高汚染地域があり、移住のために居住区の数、事故前の 178 から減少して 86 になった。

セシウム 137 の汚染レベル キュリー/km ² (ベクレル/m ²)	クラスノポリエ内の 居住区の数
1-5 (3,700-185,000)	52
5-15 (185,000-555,000)	31
15-40 (555,000-1,480,000)	3

2011 年現在、放射能汚染レベルごとの

居住区の分布は表のとおりであり、「第 1 次移住（絶対移住）ゾーン」（40 キュリー/km²以上）と「第 2 次移住ゾーン」（15-40 キュリー/km²）はほぼ移住が完了している。

地区の人口は 1985 年の半分に減り、2011 年 1 月 1 日現在 11200 人。子どもは 1985 年の 5564 人に対して現在 2512 人。出生率は事故前のレベルに達しておらず 1985 年に 16.1%あったものが、現在 13.1%。死亡率が出生率を上回っている。

労働力人口の失業率は 1%で、州平均を少し上回っている。農業生産者たちは一つの農業企業に統合された。企業は 1985 年に 11 社あったのに対して 6 社に減少した。

地区の予算は州の融資課より毎年助成を受けている。

今も毎年行われている住民の体内被曝測定

2010 年 1260 件の内部被曝測定が行われた。内訳は、大人 287 人、子供 863 人、青年 110 人である。青年の測定者のうち 2 件で基準値（1 ミリシーベルト/年）を 1.5~2 倍、超過する値が測定された。

食品の放射能汚染モニタリング結果

一全体的に「基準値」越えは減少しているが森から採取されるものはまだ高い

「基準値」（注）を越えた放射線量測定モニタリングの内訳は右の表の通り。基準値を越えた放射線量測定モニタリング結果の数は、事故後数年では 84.1%だったのに対し、現在は 6.7%まで減っている。

放射能を測定したもの	基準値をこえた割合
個人畜産家の牛乳	0.9%
森の木の実	92%
乾燥キノコ	27%
生キノコ	58%
野生動物の肉	25%
産業用木材	11%
灰（個人家屋）	4.3%
灰（産業用）	47.7%

子どもたちの健康状態

子どもの健康状態の分析により低出生体重児、早産児の数が増加していることが明らかになった。一般疾病の発病率も少し増加した。健康な子どもの割合が減少。健康状態に遅れのある子どもの数が増えた。貧血の罹患率は高く、扁桃の慢性疾患、泌尿器系の疾患、先天的成長障害の数の増加が記録されている。先天的成長障害の中では心臓・循環器系の障害、骨・筋肉障害、多くの成長障害の増加がみられる。子どもの「血液がん」（白血病や悪性リンパ腫）の罹患率は事故後数年に比べると傾向はゆるやかになっている。子どもの甲状腺異常は増加傾向にある。結節性甲状腺腫の事例が地方病性甲状腺腫をはるかに上回る。子どもの甲状腺がんは 1993 年以来、クラスのパリーエでは記録されていない。

成人の健康状態

近年、地区の大人の健康状態の傾向は疾病率、死亡率がやや増加、寿命の低下が見られ、身体障害者数とがん罹患率が国と州の平均をやや上回っている。悪性腫瘍では肺がん、胃がん、皮膚がんが多い。

大人の身体障害者の病気の内訳は、心臓・循環器系の疾患、がん、骨・筋肉系（外傷によるもの）が多い。

（翻訳：松川直子）

注）「基準値」については 2004 年の測定報告の下表をご参照下さい。

クラスノパリーエの保健局の放射能測定データから（2004 年）

測定材料	サンプル数	平均 (Bq/Kg)	最高 (Bq/Kg)	基準値を越えたサンプル数	基準値 (Bq/Kg)
水（井戸）	30	7.4 以下	7.4 以下	0	10
牛乳（個人）	715	7.4 以下	630	4	100
牛乳（コルホーズ）	18	8.9	17.5	0	100
野生動物の肉	5	1402	3200	4	370
根菜・野菜	170	7.4 以下	16.3	0	100
庭の木の实	21	7.4 以下	8	0	70
果物	13	7.4 以下	7.4 以下	0	40
じゃがいも	298	7.4 以下	35.4	0	80
白樺のジュース	4	7.4 以下	7.4 以下	0	370
きのこ	2	17027	22505	2	370
灰	68	5785	33764	10	9620
薪	56	204	608	0	740
干し草	23	672	4198	4	1300

*保健局での放射能測定器の検出限界が 7.4Bq/kg で、それよりも低い値のものは全て 7.4Bq/kg 以下として記録されている。

*「基準値」というのは 1999 年にベラルーシ政府が定めた食品の「許容レベル」のこと。ベビーフード

などの「子供がそのまま摂取する食品」の基準値は 37Bq/kg になっている。

*日本での Cs137 の測定データ(2002 年)では：牛乳をは 0.1Bq/l 以下、他の食品は高いものでもほとんどは 1Bq/kg 以下（平均 0.1Bq/kg くらい）、きのこ類は日本でも高い方だが、生しいたけ（2～10Bq/kg）、干しいたけ（数 10Bq/kg）となっている。

チェルノブイリ25周年「ロシアの汚染地域からパーベルさんを迎え講演・交流会」

“福島事故はあらゆる人々に

核エネルギーに対する考えを変えさせるでしょう”

ロシアのNGO「ラディミチ～チェルノブイリの子どもたち」のパーベル・ブダビチェンコ氏（国際プログラムマネージャー）が4月末から、原水禁などの招聘で来日し、全国各地で講演をされました。「ラディミチ」は、私たち「救援関西」が支援するベラルーシの子どもたちが保養に行っている、ロシアの非汚染地域の「ノボ・キャンプ」を運営している団体です。

「ラディミチ」の本部のあるロシアのブリヤンスク州ノボツィプコフは、チェルノブイリ原発からは170キロも離れていますが、放射能汚染のために本来なら移住をすべきとされた高汚染地（セシウム137で55万ベクレル/m²=15キュリー/km²以上）となってしまいました。しかし、人口も多く、住民の多くは移住する費用もなく、また周囲からの差別なども受ける中で、「高汚染地に住み続ける」という苦渋の選択をせざるを得ませんでした。汚染地で暮らすことの葛藤、放射能と闘う日々の中で、住民達がお互いに助け合いながら未来を切り開いてゆこうと、パーベルさんは、事故後間もなく若い人々とともにボランティア活動に取組み、その活動の中から「ラディミチ」が生まれました。

5月2日、「救援関西」も大阪でパーベルさんをお迎えして講演・交流会を持ちました。パーベルさんは、「大震災と津波、福島原発事故の被害と闘っている日本の人々との協力を強めたい」との想いを伝えてくれました。（下記、パーベルさんが来日のために準備してくれた報告原稿を紹介します。）

尚、7月末から、パーベルさんの息子さんと、「ノヴォ・キャンプ」の責任者をしているアントンさんが原水禁の招待で来日します。アントンさんは福島、広島・長崎の大会にも参加した後、8月9日には大阪で「救援関西」主催で講演・交流会を持ちます。ぜひ、ご参加下さい。（案内は12頁。）

.....

チェルノブイリ事故 25 周年についての私の考え



多くの人たちはチェルノブイリの出来事を単なる事故と思っています。私が思うに、それは惨事です。なぜなら、それは多くの人命を奪い去り、また奪い去り続けているからです。

パーヴェル・ヴドヴィチェンコ

原子エネルギー利用は経済的にとても有利なので、ますます発展させなければならないと思っている人たちがいることを私は知っています。

そのようなことを言うのは、1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故の結果、被災した地域の現状を知らない人たちが、自分の行動が原子エネルギー利用と直接結びついている人たちです。私は汚染地域に住んでいる人たちの苦しみをみているので、違う考えをもっています。

残念ながら、現在までウクライナ、ベラルーシとロシアのチェルノブイリ地域の住民がチェルノブイリ原発事故の結果に苦しんでいることは、世界の様々な国々の多くの人たちに知られていません。

多くの問題がこの25年間、我々チェルノブイリ被災者に降りかかってきました。最も有能で社会に向けて十分に教育された若い人たちが故郷から永遠に立ち去り、二度と戻って来ません。我々の病院には医者が足りず、学校には優秀な教師が足りず、企業からはずっと前から優秀な専門家たちが去る一方、新たな技師たちは高放射能地帯へは来たがりません。優秀な労働者たちや農民たちさえますます少なくなっています。これは来る年も来る年も続いています。最も活動的な住民層の離郷は放射能地帯になった村や小都市を衰退へと導きます。我々の地域の高放射能の農産物は競争力がなく、セシウムとストロンチウムに汚染された土地には投資家は足を向ける気がありません。以前、経済的に発展していた地方は、今や衰退しています。

1986年、私は34歳でした。4月末にラジオで、チェルノブイリ原発で小さな事故があったが、人体に危険ではなく、すぐに始末されるだろうという報道がありました。だが、4月29日、私の知り合いの初等軍事教練の教師セルゲイ・シゾーフは偶然、線量計のスイッチを入れ、高い放射能を検出しました。彼はこのことを市と地区の共産党指導者に伝えました。しかし、市と地域の当局はさらにほとんど2週間、放射能がすでに我々の生活圏に到達していることに沈黙していました。この沈黙の時間は住民にとって高いものにつきました。放射性ヨウ素は最初の2週間、数万、数十万の大人たちや子供たちの甲状腺を強く照射しました。後に、数年たって、これは人々の免疫力の低下や、今日、我々の地域に広まっている甲状腺がんを含む一連の特徴的な病気の発生の中に現れ始めました。

本当に残念なことに、当時、移住の資金がなかったために、私は家族と一緒に汚染のない地域に立ち去ることができませんでした。私の妻と息子（9歳でした）は高放射能スポットの真ん中にあったノヴォズィプコフに住み続けました。

放射能（放射性ヨウ素、セシウム、ストロンチウム）は放射性的な雲とともに私たちのところ

にやって来ました。4月末には強い春風が吹いていて、それがチェルノブイリから180kmの私たちのところへこの恐ろしい災いを伴った雨雲を運んで来たのです。放射能は大小のスポットとなって降り注ぎました。とても多くの放射性のちりが私たちの町の周囲の森に見つかりました。放射能は湖や川の水の中にも入り込みました。

短時間で地域全体が汚染されました。政府と私たちの市当局は何をなすべきかを知りませんでした。首尾一貫した合理的な活動を始めるま



5月2日「救援関西」主催の講演会で（奥左）

で1か月以上かかりました。それは例えば1か月後（夏に）、すべての児童を汚染のない地域に避難させ、それと同時に住民からすべての雌牛（牛乳の飲用はとても危険でした）、豚やその他の家畜を接収しました。学校と保育園の敷地で上層（20-25cmの土）を除去し始めました。高レベルの汚染を示していた最も古い屋根を葺き替えるなどです。

私たちの村や町は1986年の夏にすっかり静寂に包まれました。ニワトリやガチョウや牛や子豚の音が聞こえませんでした。通りに子供の声がしませんでした。ただ場合によっては自分の仕事の義務を果たすためにやって来る人がいました。私の隣人たちは今でも未来のない生活のあの最初の感覚を戦慄しながら回想しています。

数年後、小さな村々が汚染のない地域に移住し始めました。でも、老人たちはしばしば離れたがらず、自分たちの家に残りました。それもこれらの人々にとってとても大きな悲劇でした。息子たちや娘たちによって新しい場所に連れて行かれた人たちは、自分の村や先祖の墓を恋しがり、しばしば天寿を全うせず亡くなりました。

なぜ私は社会团体「ラディミチ - チェルノブ
ィリの子供たちのために」を結成したか、この
団体の目的は何かをお話しします。

町に残って、私は師範学校の教師として働き
続けました。私は村の青年男女が人気のなくな
っていく学校に戻って来ることが分かっていた
ました。彼らは低学年の生徒たちを教えるだけ
でなく、去って行った物理、数学、その他の教
師たちに替わらなければなりません。

チェルノブィリの災害はゴルバチョフのペレ
ストロイカの時期と重なることになりました。
人々は当時、自分たちを自由だと感じ始め、
集会に出て行き、政府や地元の役人たちが
チェルノブィリ地帯の人々の苦境に注意を
向けるよう要求しました。ある時、私も
そのような集会で演説しました。私は、
美辞麗句では我々は何一つとして解決
できないと言い、社会活動に積極的な
市民に演壇から下りて老人たちや子供
たちや障害者たちのために何かをする
よう提案しました。ごみの山を横目に
この集会に来る代わりに、我々は
行って我々の通りからそれを片づけ
なければならないと、私は思い、
その時、人々に言いました。

これは多くの人たちに気に入られ
ませんでした。だが、私と学生たちは
他のもっと弱い人たちを支援する
ことを通して（精神的意味で）も
っと強くなろうと決意しました。
1987年に私たちは小さなチェル
ノブィリの村々の孤立した老人
たちと障害児たちへの支援を
始めました。このアイデアは若い
精力的な学生たちが気に入
りました。仕事が始まりました。

学生たちが成人すると、彼らの
多くが私のところに戻り、私
たちの団体で仕事を続けること
を望みました。私たちはさらに
新しい仕事のアイデアを探し
始めました。それらはチェル
ノブィリ地域の諸問題に対する
回答として浮かんだのです。
時折、無関心ではいられない
知らない人たちが私たちの
ところへやって来て、助力を
申し出てくださいました。

こうして1993年に15歳の
アントン（私の息子）は、
現在でも活動しているコン
ピュータクラブを結成しま
した（これは家にコンピ
ュータがない子供たちにと
ってとても重要です）。

1993年に女医のオリガ・
ジューコヴァはドイツの
パートナーたちとともに
小児脳性マヒの子供
たちの医療の手当てを
する診療所を設置し

ました。今日、ロシア全国や
その他の国々から350 -
400人の子供たちが私
たちの診療所に来て
治療を受けています。

1994年に私と学生たちは、
学生の小さなNGOに
属する、ロシアで最初
のキャンプを設置しま
した。私たちはそれを
ノヴォケムプ（新しい
キャンプ）と命名しま
した。そこでは毎年
夏に最大560人の子
供たちが保養し、そ
の中には孤児たち、
障害児たち、複雑な
事情のある家庭の子
供たちがいます。
NGO「ラディミチ -
チェルノブィリの子
供たちのために」は
ロシア、ウクライナ、
ベラルーシの放射能
で汚染された地域に
住んでいる児童や
ティーンエイジャー
たちが休養し、健康
を増進することが
できるようにしま
した。恒例になった
班は合同班、国際
班、コンピュータ班、
若い画家班などです。

その後、「ラディミチ」は
知恵遅れの児童のた
めに社会復帰セン
ター「ラディミチ」
を創設しました。
現在、そこでは重
い知的および複
合的障害をもつ、
6-20歳の15人
の児童、青年男
女が、教育、発
育、復帰に関
わる質の高い
サービスを受
けています。
彼らの両親
たちは職に
就くことが
できるよう
になりました。

数年前、私たちは
ロシアのボラン
ティア活動支
援センターを
創設しました。
この仕事で私
たちは若者の
間のボラン
ティア精神の
向上に影響
を与えよう
としています。
私たちは毎月、
他のロシア
の都市から
来る若いリ
ーダーたち
や活動的な
学生たちの
ための課程
を教えるセ
ミナーを開
いています。
それと同時
にこのプロ
グラムには
約60人の
私たちの
団体のボ
ランティア
が参加して
います。彼
らはブリ
ャンスク州
の養護施設
、寄宿学校
、保育園に
住んでいる
児童やティ
ーンエイ
ジャーのた
めの行事を
実施し、祭
日の祝い、
集団ゲーム
、フェスティ
バル、コン
クールその
他が開催さ
れています。

私たちの甲状腺検査
室の医者たちは
2004年から
私たちの市の
全住民の甲
状腺を検査
しています。
目的は甲
状腺の病気
を発見し、
患者の治
療援助を
すること
です。2010
年には約
2000人が
検査を受け
ました。

私たちはチェル
ノブィリ情
報センター
を創設し、
そこでは
次のことが
実施されて
います。
チェルノ
ブィリを
テーマと
する資料
の収集、
整理と保
管、展示
の実施、
また、放
射能で汚
染された
地域で安
全に暮ら
すという
緊急の問
題に関す

る生徒たちや学生たちへの啓発、健康な生活法の宣伝などです。結果として、2010年にはプログラムに580人の生徒たちと学生たちが参加しました。

NGO ラディミチのボランティアの一人、アンドレイ・タロヴェンコは2000年に若い画家たちの国際コンクール「私は自分の世界を描き、それをあなたに贈る」を開催しました。結果として、毎年300人から500人の若い画家たちが、ロシア、ベラルーシ、インド、ハンガリー、カナダ、アメリカ、セルビア、ウクライナなどからフェスティバルに参加しています。

NGOには青年センター「ラディミチ」が創設され、その課題は困難な生活状況にある児童やティーンエイジャーに、インターネットカフェに行ったり、体を動かすゲームや卓上のゲームをしたり、ビデオで映画を見たり、創造的な活動に参加したりする可能性を提供すること、また、子供たちのためのゲームや行事を開催することを目的として、青年センター「ラジミチ」の社会的に意味のある活動へ学生たちを引き入れることです。

放射能地帯に残った私たちは皆、身動きが自由になりませんでした。私たちの多くは立ち去りましたが、他の人たちはそうなりません。何人かの私の友人は両親あるいは親戚が病気だったり、年老いたりして、新しい場所への困難な移住の準備ができませんでした。何人かの友人たちは同僚や部下に対する職業的な責任感が強かったのです。

医者は自分の病院を放り出さたくはありませんでした。なぜなら、余りにも多くの彼の同僚たちがよりよい生活を求めてもう立ち去っていたからです。

教師は自分の生徒たちを、ジャーナリストは



自分の新聞を、機械修理の職人は自分の修理工

場を等々、投げ出すことができませんでした。逆説的な状況が生まれました。人は自己保存のためには外へ出なければなりません、いくつかの客観的な理由でそうすることができません。そのような人たちは私は状況の人質と名づけます。

福島での悲劇について私は何を言いたいでしょうか。

福島の事故はあらゆる人々に核エネルギーについての考えを変えさせるでしょう。

チェルノブイリ事故の後、西側世界の多くの人たちには、原子力の大惨事がソ連で起きたのは、核施設の生産と操作でテクノロジーに従わなかった罰だと思われていました。

多くの人たちには、高い水準で労働が組織されている他の国々では、そこで原子力エネルギー産業に関わっているのが生産と操作の高い技術を持った尊敬すべき専門家たちであるということからして、そのような大惨事が繰り返されることはありえないように思われていました。

その際、エレクトロニクスとよく訓練された人々によって制御された列車が衝突事故を起こすという多くの事実が黙殺されていました。毎年、航空機の墜落、海の船舶の衝突が起これ、宇宙の軌道から人工衛星が落下します。核テクノロジーでは事故や大惨事はありえないと真面目に考えてきて、今もそう考えている私たちのうちのある人たちは何と自信過剰なことでしょう。

さらにテロもあることを忘れないようにしましょう。そこでは時として余りにありえない場所が選ばれるので、人間の理性はどうしてそのようなことをすることができるのか想像することさえできないのです。

日本の福島で起こっていることはもう1度全世界に、私たち皆が立ち止まって、多くのことを考え直さなければならないことを教えました。歩んできた多くの過程を私たちは人類として今、チェルノブイリと福島の共同の経験から出発しながら、つまり新しい目で見なければならぬのだと私は思います。

さもないと（どうかそうなりませんように）私たちはこの不吉な出来事の連鎖の悲しい続きを見ることになるでしょう。

（翻訳：坂本博）

「ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ」



東日本大震災に伴う、福島第一原発事故により、大量の放射能が放出されています。放射能の影響は、大人よりも子どもの方が、はるかに大きく受けます。外で遊ぶことを制限され、不安な日々を送る子どもたちを、一刻も早く、放射線量の少ない土地へ、移動させたい。

その思いから、私たちは動き始めました。しかし、私達個人にできることは、限られています。今できることは何か…。

それが、福島の子供たちと、京都でキャンプ（野外活動、ものづくり）することです。

キャンプに参加してもらうことで、福島の人と直接つながり、これからのことを、一糸着いて考えていきたい。

ほんの少しの間だけれど、子どもたちに思いやり外で遊ぶこと。

自分たちの手で、ものを作る楽しさ、人と関わることの大切さを経験してもらいたい。

そして、これからの人生を、自分の力で選ぶ切り開いていく力をつけてほしいと、願っています。

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ世話人

艾菜津子

久保田 美緒



「ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ」は東京電力福島第一原発事故を契機に出来た若者中心のグループです。福島事故により、チェルノブイリ事故の2～3割規模の大量の放射能が放出され、被災地では放射能の中で放射能と向き合う生活を余儀なくされています。その中で、とりわけ放射能の影響を受けやすい子ども達に思いを寄せ、放射能の少ない所に移動させたいという思いから動き始めたそうです。5月のゴールデンウィークに1回目のキャンプを行い、子ども達との生活の中で「私達の心に、それぞれの種をまきました。」と貴重な体験をされたようです。そして今、1ヶ月にわたる夏のキャンプ「京都『夏の家』」を成功させようと、資金集めや準備に奔走されています。

私達は、ベラルーシの汚染地クラスノポリエとの交流を通じて、子ども達が非汚染地域にある「ノボ・キャンプ」に保養に出かけ、いろんな貴重な体験をする事によって目が輝き、生き生きとするという事を教えて貰っています。そして数年来、微力ですが、保養キャンプに参加するための資金援助をしてきました。フクシマ事故以降、被災者の方々にどんな支援できるかを考えている中で、今回「ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ」の若者達と知り合い、その趣旨に共感しました。「チェルノブイリ25周年」の企画時やその後寄せられた「福島被災者支援」のカンパをこのグループに託し、少しでも役立ててもらうことにしました。これからも皆様の御協力をよろしくお願い致します。



原発止めよう大阪一万人集会報告

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ実行委員会 田中一央

6/11（土）大阪であった、「原発止めよう大阪一万人集会」というデモに参加してきました。今回はその報告。

11時ぐらいに出町柳集合、京阪電車に乗り込み、京阪のほぼ反対の端っこ北浜へ。集合場所の中之島の高速道路下へ。

14時スタートなので、ついた時ははまだ人もまばらで。

でも、腹ごしらえをしていると、パラパラ人が集まってきて、1時間後にはもう広場いっぱい人だらけになってました。

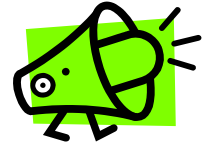
今回の目的の、広報活動と募金活動。

ゴーわくの活動もそんな知られてないし、運営費はいただいた募金ですので、夏のキャンプのためにも頑張らないと。ってことで、本格的にデモがはじまる前に、募金箱とリーフレット・募金お願いチラシをもって活動開始。

以前からみおちゃんが交流していた、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の方々も自分たちの活動そっちのけで手伝ってくれました。

そんなこんなしてるうちに、デモがスタート。

路上にでると、「原発反対！（一人拡声器）」「原発反対（みんな）」というやまびこみたいな感じで、反原発を主張、また反原発替え歌を歌いながらの行進です。ゴーわく隊は、その本隊とつかず離れず、歩道を歩いてリーフレットとピラを配ってました。



この日の活動で募金箱・リーフレット・ピラのできが良くて（かわいくて）、思わずとってくれる人がけっこういました、そのおかげでうまく団体の説明ができたりと良い感じでした。

でもやっぱり歩いている人たちの多くは、急いで通りすぎたり、かなりよけて通ったり、興味なさげだったり温度差を感じました。

原発関連のことは、こんなにいろんなメディアに取り上げられてるのに、やっぱり他人事の人がかかりたくさんいるのはさみしいことだと思いました。

今回私はたまたまこっち側だったけれど、いつもならだいたいあっち側、それも無関心な人の一人だったと思う。それをこっち側から見ると、こんな冷たく見えて、こんな無力に思えるのかという、見え方の違いはさみしいけど、一つの収穫だったなと思います。

デモの途中に原発養護派、というよりも反原発派に反対する派閥がいて、デモをしている人たちに、拡声器で「暴言」をはいていました。考え方はそれぞれ違うし、原発賛成派と反対派に分かれるのはしかたないことだと思います、でも思っていることがあるなら「主張」すべきで、「暴言」であってはいけないと思います。

そんな暴言にひるみながらも、なんとかゴール難波の公園まで歩き切って、最後にもう一回カンパのお願い。デモに参加してる人たちは意識が高いせいか、かなりたくさんの方がカンパしてくれました。

そしてデモ終了後、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の人たちとご飯を食べ。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の方々が今までに集めてくれた基金をゴーわくにカンパしていただきました。

ゴーわくにカンパしようと思ってもらえたのも、つながりのおかげです。大きくて実績のある団体もあるけれど、小さくて活動は数えるほどのゴーわくにカンパしようと思ってもらえたのは、どんな人がどういう考え方で活動しているのか、どういう雰囲気の団体なのかということが肌でわかる、手の届く範囲にある団体だったからだと思います。

自分達の限界を越えないように、自分達にできる範囲のことを精一杯出来れば良いなと思います。今回いただいたカンパもムダにしないように、大切に使おうと思います。ありがとうございました。

全国一斉 6.11行動

久保 きよ子

6月11日、「原発いらん！関西行動」第2弾に4000名が結集しました。

これは、「4.16原発いらん！関西行動」に続き、フクシマ原発事故から3ヶ月目にあたる6月11日、全国一斉アクション、脱原発社会を実現させるべく、各地で、一斉に集会やパレードが繰り広げられました。その一環でもあります。

私たちは、大阪中之島剣先公園で集会を開き、御堂筋を南下し、難波まで、パレードしました。

- ・ 関電の原発を止めよう！
- ・ 脱原発社会を！
- ・ 再生可能エネルギーに転換を！
- ・ 自然エネルギー政策を進めよう！

と、シュプレヒコールを上げながら、約7キロにも及ぶ御堂筋を元気に歩きました。

当日は、梅雨入りの中、朝まで激しく降り注いでいた雨も集会が開かれる午後になると、ピタリとやみ、もっていた傘や合羽が重く感じられました。

今回の集会には、フクシマの子どもたちをサマーキャンプに誘う計画を立てている京都の学生さんたちも参加しました。大きなカンパ箱をもってキャンプが成功させるためのカンパを募っていました。

この若い人たちとも連携をして、私たちチェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西もこの取り組みに賛同をしています。



私たちは、ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリ・JCO事故に続き、ヒバクシャを二度とつくりたくない、活動をしてきました。フクシマ原発事故に関わる労働者被曝、放出放射能汚染による住民の被曝問題が私たちにとって、大きな課題となりました。

労働者の高線量被曝、汚染地で生活していた子どもや赤ん坊の健康問題も心配されます。

国が責任を持って健康補償をするよう国への交渉もしました。「国への要請書」への賛同も訴えてきました。

国は、原発推進を行なってきた以上原発内作業員、住民の健康については、一生補償すべきことです。

故郷を離れ、避難しなければならない人々の想いを心に刻み、原発のない安心、安全な社会を実現させなくてはなりません。

ベラルーシ・クラスノポーリエからのお便り

5月に、岡山県にお住まいの奥平純子さんからお便りを頂きました。奥平さんは「3/11、最も心配し、恐れていたことが現実となってしまった」ショックで体調を崩してしまったけれど、「こんなことではあかん！」と気を取りなおし、自分で出来ることをやろうと思っていたそうです。そんな矢先の4月16日にクラスノポーリエのスヴェトラーナさん（ソーマチカ幼稚園の先生）からお便りが届きました。その暖かい気持ちと友達の素晴らしい訳に感動して、事務局に宛にお便りを紹介していただきました。奥平さんとスヴェトラーナさんの文通はもう17年に及ぶそうです。私達もスヴェトラーナの暖かい気持ちや思いやりに触れて嬉しくなり、絆の深さを感じました。皆さんとその思いを共有したいと思いました。奥平さんをお願いして、遅くなりましたが、お手紙を掲載させていただきます。



こんにちは、じゅんこさん、ご家族のみなさん！
ベラルーシのスヴェトラーナより親しみを込めて。

多くの苦しみを味わったベラルーシに住んでいる誰もが、日本の皆さんに起こった惨事を驚きをもって、受け取りました。まず、私の家族の皆が「じゅんこや家族の人たちはどうだったんだろう？じゅんこの家族は大丈夫だよね？」と訊いてきました。あの惨事がじゅんこさん一家には影響なかったことを祈っています。

でも、日本の皆さんには、被害をもたらしましたね。家族全員が皆や皆さんの健康のこと、被害の状況をととても心配しています。

新聞やテレビでは災害の跡や、原発が批判されていること、放射能のことについて、とても恐ろしい様子を伝えていたり、津波が襲ってくる前の様子をビデオで流しています。本当に怖いです。

でも皆さん、日本の皆さんがどうしているかについては、良いことばかりが伝えられています。一強くて、頑張り屋で、パニックになることなんかない。

この天地異変がもたらした苦難を、最小限に食い止められることを願っています。

じゅんこさん、この困難な時に、私たちに出来ることはありませんか？

この人たちは、チェルノブイリの大事故の時に、じゅんこさんたちが助けて下さったこと、私たちは気にかけて下さったことを覚えています。私たちは、これがどういうもので、人々の健康にどう影響するかをよく知っています。事態が落ち着くまで身体を護り、汚染されたものは口にしないようにして、出来るだけ外気に当たらないようにしてくださいね。

国内では、被災した皆さんに送る義援金活動が始まっています。

色々な国の人々がみんな協力すれば、日本も日本の皆さんも元気を取り戻して、被災した町や村を復興させることが出来ると思います。

私たちはいつも、皆さんのそばに居ますからね。

皆さんのことがとても心配です。

最善を祈っています。

スヴェトラーナと村の皆より、最善の希望をこめて！

皆さんのことをいつも想っていますよ。

いつでも私達を頼ってくださいね。



☆集会案内☆

【原水禁大会 ひろば】

踏み出そう脱原発

フクシマ・ヒロシマ・ナガサキ・JCOを結んで

「ヒバクを許さない集い」 part 1 2

8月5日（金）午後2時～4時／ホテルチューリッヒ東方 2001（☎082-262-5111）

【講演・交流会】 チェルノブイリ被災地からアントン・フダチェンコさんを迎えて

～ロシアの子ども達の「夏保養キャンプ」の経験に学ぶ～

8月9日（火） 午後6時半～／大阪市立総合生涯学習センター（大阪駅前第2ビル5階）

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

問い合わせ：090-3941-6612(ふりつ), cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

【現地福島と関西を結んで】

フクシマ事故から脱原発へ

佐藤龍彦さん（双葉地方原発反対同盟）をお招きして

9月10日（土） 午後1時半～／市民交流センター なにわ（環状線芦原橋下車すぐ）

主催：ヒバク反対キャンペーン

共催：若狭行動連帯ネットワーク、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西、地球救出アクション

【戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル 「福島からのアピール」等】

9月11日（日）午前10時～午後3時／大阪 長居公園

主催：反核フェスティバル実行委員会

【9.19 5万人行動 「さようなら原発集会」】

9月19日（休日）午後1時／東京 明治公園

主催：原水禁国民会議



カンパのお願いとお詫び

いつもで心苦しいのですが、カンパの御協力をよろしくお願い致します。チェルノブイリの子ども達の夏の保養支援を続けています。また福島の子どものキャンプにも支援を続けたいと思います。そして、今年もチェルノブイリ被災地の訪問を計画しています。是非皆様の御協力をお願い致します。

なお、6月4日以降現在までカンパに御協力頂いた方のお名前は、申し訳ありませんが、次回のジューブりに載せさせて頂きます。恐れ入りますがよろしくご了承下さい。

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」

郵便振替：00910-2-32752